



切絵「陰陽寅図夫婦」比企善彦作

うぶすな

茨木神社社報

発行所

茨木神社社務所

茨木市元町4-3

072 (622) 2346

http://www.
ibarakijinja.or.jp/

おほみこころ おおみたらら 大御心と国民

昨年(平成二十一年)は、天皇陛下御即位二十年の佳節を迎え、各地で奉祝行事が盛大に行われました。

今上陛下は、初代神武天皇様から数え第百二十五代目の天皇にあたられます。日本書紀によれば神武天皇様が橿原の宮で即位されたのが今から二千六百七十年前。世界の歴史の中でこれだけ長く連続と続いてきた国はありません。アメリカは建国してまだ二百三十年ほどですし、お隣の中華人民共和国は昨年建国六十年を迎えたところです。

この日本の歴史と伝統と文化こそ、日本人の心と言えます。そしてその神髄が陛下ご自身にあり、ご皇室の姿の中にあります。

天皇陛下の様々なご公務の中でも最も重要なものに祭祀があります。陛下は、その祭祀を通じて国の繁栄と国民の安寧・豊穰を祈られてこられました。

国民を、クニタミとも読むことがあります。古くはオミタカラといいました。オオミタ(大御田)＋カラ(輩)で、古代には国民を天皇に所属する田地を耕す存在としてとらえた言葉として表現しましたが、次第に、天皇陛下が自分の宝として愛護する民を指す言葉として国民と表記して「オオミタカラ(大御宝)」と表現しました。国安かれ民安かれと祈られ、国民を守ろうとされるこれが陛下の「大御心」です。

その陛下の大御心に見守られてきたことに對し、国民が陛下の大御心を戴き、限らない敬意と感謝の気持ち捧げてきました。陛下と国民の絆が日本の心であり、日本文化の基軸です。

橋下大阪府知事も御即位二十年を寿ぎ「我が国と国民の栄華が千代に天皇陛下と共にあり続けますことを祈念申し上げます」と寄稿されています。この様に天皇陛下と国民は常に共にあり、その絆は、近代化して社会の構造が変化していても変わることがありません。

シリーズ神道 ③1

賽銭のはなし

私達は神社へお参りする時、当たり前のように賽銭箱にお賽銭を投げ入れ、深々と頭を下げ、拍手を打って神さまにお祈りをします。これら一連の行為はいうまでもなく、神様に対する信仰を表す所作であります。しかしながら、賽銭を投げ入れる行為は、再拜、拍手などは違い、特段方法が定められているわけではありません。よってどのように入るともよいのですが、普通は「投げる」人がほとんどで、逆に、うやうやしく賽銭を供えるという姿は私達にはあまりびんと来ません。よく考えてみると普段何気なくしている賽銭を「投げる」という行為は、神様に対してたいへん失礼なことのように思えます。

謝する初穂や、海の幸、山の幸などの神饌に端を発するといわれます。ただし、祭祀における神饌とは異なり、個人的なご利益に対する行為として、古くは神前に米を時く「散米」や、洗米を紙に包んで供えるおひねりといった形で神前に供えられました。中世後期、貨幣経済が発達するに伴い、米の代わりに銭が用いられるようになります。江戸時代に編纂された『日葡辞書』にも、「賽銭」の語が記されていますが、それ以前は「散銭」または「参銭」と呼ばれ、文字通り銭を投げるものであったことが窺えます。

私達日本人には古くから信仰の対象に向かって物（この場合は主に銭）を投げるという習慣があります。古来より、我々はさまざまな場面で「撒く」「投げる」といった行為を行います。これは現代でも同様で、身近な例を挙げれば、大相撲の土俵入りで、力士が塩を撒く場面はお馴染みでしょう。節分の豆まきもそうですし、地鎮祭でも、地域による違いはありますが、四隅に米や酒を撒きます。

これらの行事は「祓え」として広く理解されています。谷省吾氏は、「米や酒を散ずることによって神を鎮め、神に守らせたまへと祈るのであって、それが結局、祓へに外ならぬことになる」と述べています。民俗学者の新谷尚紀氏は「貨幣」と「穢れ」との関係に注目し、「賽銭は、貨幣に依り付けられた穢れを放ち捨てて祓え清める意味がある」と述べています。さらには、「神社は貨幣に依り、それによつて神を鎮め、神に守らせたまへと祈るのであって、それが結局、祓へに外ならぬことになる」と述べています。民俗学者の新谷尚紀氏は「貨幣」と「穢れ」との関係に注目し、「賽銭は、貨幣に依り付けられた穢れを放ち捨てて祓え清める意味がある」と述べています。さらには、「神社は貨幣に依り、それによつて神を鎮め、神に守らせたまへと祈るのであって、それが結局、祓へに外ならぬことになる」と述べています。

献詠 火串会

竣功の覆屋眩し初詣 倉垣刀美子

夜更しの癖も許さる三日まで 岡田 晴江

三世代歌留多取る手の入り乱れ 岡本 靖子

荒波を風へと願ふ去年今年 小野 晶子

景気呼ぶ初恵美須へと槌の音 河辺さち子

餅を搗く一つ食ひたき杵の音 北川 三郎

破魔矢手に搦手門の詣で入 北川 一志

槌音の不況追ひ出す初句会 北川 睦子

初鶏を待ち兼ねぬたる膳の前 倉垣 政一

付いた人々の穢れを吸引し、浄化する場所である」とも述べていますが、「厄年や年祝いに、または、野辺送りの葬列で銭を撒く」というような、日本各地に残る、信仰や儀礼の場において、貨幣は、米などに変わって祓えの儀式に介在する重要なアイテムといえます。

片言の一笑百笑初笑 菅原 澄江

還暦の子に注がれたる年酒かな 高橋 千雁

初詣不況乗り切る神だのみ 田中美佐子

一つつつ神事迎へて春を待つ 谷本 房子

雲切れて日の差す瑞枝梅ふむ 辻 たかし

初暦期したることのあれやこれ 長谷川ゆたか

大宮に大吉引くも梅かたし 林 曜子

祖父よりの器守りて屠蘇を酌む 武藤千代子

懐かしき出店の声や初詣 八木 徹

短冊の裾に朱玉の夷千両 山田 国夫

神々まのおはなし ⑱

猿女の君

さて、邇々芸命さまは天宇受売さまに「この道案内をつとめた猿田毘古大神は、あなたが何者であるかを明らかにした神ですからあなたがもとの国まで送っていきなさい。またその神の名前をもらい受けてお仕えしなさい」と仰いました。そう言うわけで、猿女君らが、その猿田毘古の男神さまの名を受け継いで、女を猿女君と呼ぶことになりました。

天宇受売命さまは猿田毘古神さまを送り、お帰りになりそしてすべての魚を追い集めて「お前たちは、天つ神である御子にお仕え申し上げるか」と尋ねられました。すべての魚は「お仕えします」と申した中で、海鼠は、申しませんでした。天宇受売命さまは海鼠に「この口は、返事のしない口だ」と言つて紐のついた小刀でその口を裂きました。それで、今でも海鼠の口は裂けているのです。これによつて、代々志摩から新鮮な海産物を献上してきた時には、猿女

君らにお下しになるのです。

※猿女君：朝廷の祭祀に携わつてきた氏族

木花之佐久夜毘売

邇々芸命さまが笠沙の岬で、美しい乙女と出会いました。

そこで「お前は誰の娘か」と尋ねられたところ「大山津見神の娘、名は神阿多都比売、またの名は木花之佐久夜毘売と言います」と答えられます。

また「お前には兄弟がいるか」と問われたところ「私の姉、石長比売がいます」と答えられました。

そうして「私はお前と結婚しようと思う。どうか」と仰せられたところ、答えて「私は申し上げられませんが、私の父大山津見神が申しませう」と仰いました。

そこで、その父の大山津見神さまに求めて遣いをやつた時、大山津見神さまは大変喜んで、その姉石長比売をそえ、たくさんの品を台に載せ持たせて、差し出しました。しかし、その姉は、大変醜かつたので、見て恐れて送り返し、ただ木花之佐久夜毘売だけを留めて一夜を共に

しました。

大山津見神さまは、石長比売を返してこられたために、大いに恥じ、「我が娘を二人とも差し上げたのは、石長比売をお使いになれば、天つ神である御子の命は、雪が降り風が吹こうが、常に岩のようにいつまでも堅く動かずにいらつしやるだろう。また木花之佐久夜毘売をお使いになれば、木の花が咲くようにお栄えになるだろうと誓いをたてて差し上げたのです。

この様に石長比売をお返しになり、ひとり木花之佐久夜毘売だけを留められたために、天つ神の御子の御寿命は、花のように短くあられるでしょう」と言われました。このために、今に至るまで天皇の御寿命は長くないのです。

その後、木花之佐久夜毘売が邇々芸命さまのもとに参上して「私は身ごもりました。今、産もうとする時に、天つ神の御子をひそかに産むわけにいきませないので、申し上げます」と仰いました。これに対し邇々芸命さまは「佐久夜毘売、一晚で身ごもったと言うのか。これは我が子ではない。きつと国つ神の子であろう」と仰せられました。これに対して「私が身ごもった

子がもし国つ神の子ならば、産む時に無事ではないでしょう。もし天つ神の御子ならば、無事でいませう」と申され、ただちに、戸のない広い建物を造り、その中に入り、土で塗り塞いで、まさに産もうとする時にその建物に火をつけてお産みになりました。そして、火が盛んに燃えている時にお産みになった子の名は火照命さま。次に火須勢理命さま。次に火遠理命またの名を天津日高日子穗々手見命さまの三柱の御子をお産みになりました。

就任報告

この度、下中条町の鎌田健司様に平成二十一年七月より神社総代にご就任いただきました。

帰幽報告

永年総代として、神社護持のため何かとご尽力を賜りました川勝武夫様が平成二十一年七月にご逝去されました。

ここに永年にわたるご功績に衷心より感謝し、御霊の御平安をお祈り申し上げます。

御垣内にてお米作り



今年、春、「イセヒカリ」という稲の苗を賜り、当社御垣内において栽培を行いました。

このイセヒカリは平成元年の夏、伊勢の神宮の神田（神宮のすべての社殿の神饌米を栽培する田）にて、度重なる台風で神田のコシヒカリがすべてなぎ倒される中、スクツと立ち残った二株の黄金色に輝く稲を神田管理者が発見しました。それから数年間、試験栽培を行い、平成六年に山口県の農業試験場に評価を依頼しました。その結果、籾数、耐病性、そして美味しさの基準となる食味値においてもコシヒカリを上回る値を示し、「新しい品種」との評価結果を得ました。

平成八年、神宮ではこの稲を聖寿無窮を祈念し、また皇大神宮御鎮座二千年を記念して、少宮司酒井逸雄氏によって「イセヒカリ」と命名されました。当初この稲は天照大神様の御神慮として、「門外不出」としておりましたが、全国からの強い要

望により先例を改め、主要神社や篤農家などに特別に種籾の下賜を認めました。当社社御垣内で育てたこの貴重なイセヒカリの苗は、神々の恩恵を蒙り、風雨に耐えながらも日毎に成長し、豊かに稲穂が実りました。そして十月二十六日に、古式に習い「抜穂祭」を齋行し、十一月二十三日の新嘗祭に御神前にお供え致しました。「抜穂祭」とは、いわゆる刈り取りの神事で、古代、鋭利な鎌等がない時代においては、稲穂を摘み取っていた折りの言い方です。毎年、天皇陛下も春には皇居の水田で御自ら御手植され、秋には御自ら刈り取りをされ、神宮神嘗祭にお供えされます。平成の御代替わりと時を合わせて誕生した「イセヒカリ」、昨今、稲作を始め日本の農業が様々な危機に直面している中、この新種の誕生はまさに大神様の御教示ではないでしょうか。



茨木神社の文化財

江戸中期 宗源神宣詞

夏祭りも滞りなく齋行され、ようやく平生に戻りつつある頃、倉庫の奥隅から錦織の布で装丁された木箱に納められた黄色地の文書が見つかりました。その文書は奥宮「天石門別神社」に對するもので「延享五歳・・・神祇管領卜部兼雄二告テ勸請ヲ乞・・・宗源ノ神宣ヲ申行ヒ・・・遷之鎮女」と書かれていました。要約しますと「延享五年に京都吉田神社の神祇管領卜部兼雄に何らかのものを遷し鎮める許可（これを宗源の神宣という）を願う」というものであります。卜部（吉田）兼雄とは、江戸期の卜部家の当主で吉田神道の中興の祖と言われる人物。江戸時代、それまで代々神祇官の長官を勤めた白川家に代わって、卜部（吉田）家が勢力を増し、全国の多くの神社を管掌し、諸社に對し神々の神位、神階をはじめ神職に對する装束着用の許可を行うようになっていました。延享五年といえば今から約二百六十年前（一七四八年）、江戸中期徳川吉宗の頃。この文書により当時、当社も白川家ではなく吉田家に属していたこと

が判明しました。また、この時奥宮「天石門別神社」において神様を御遷座する必要がある修造が行われたであろうと推測されますが、この時の棟札等が残されておらず詳細は不明です。



これからの主な神事

- 十二月三十一日 越年祭
- 一月一日 歳旦祭 午前十時
- 一月九日〜十一日 十日戎祭
- 一月十五日 御火焚(とんど) 祈禱木奉焼祭
- 二月一日 初午祭はつごまさい
- 二月三日 節分祭・鎮魂星祭
- 二月十一日 紀元祭
- 四月八日 人形奉焼祭
- 四月十八日 春祭・奉賛会厄除安全祈願祭